

## 4. 乳幼児突然死症候群の臨床病理学的検討

昭和大・病理 神田実喜男

昭和大・病理 長田 道夫

過去3年間に「乳幼児突然死」と診断され解剖が行なわれた症例を収集し、疫学班(2)(渡辺富雄分担研究者と研究協力者)で検討し「SIDS」とされた12例について臨床病理学的に検討を行なったので報告する。

疫学的事項に関しては死体検案書を参考にしたためデータが不十分であるが分かる範囲で行ない、また病理組織学的には多くの臓器について検索したが、この度は肺の所見について述べる。なお、肺の病理組織学的所見は昭和57年度「乳幼児突然死(SIDS)」に関する研究、研究報告書(昭和58年3月)に発表(34頁)してある分類を用いた。

### I. 疫学的事項の結果

#### ①性別発生頻度

男7例、女5例である。一般にいわれる男に多い事と一致する。

#### ②死亡月

4月に3例と最も多く、7～9月に6例が発生しており、寒冷期である12～3月は3例にすぎない(表1)。

表1

死亡月	1例	2例	3例
1月			
2月	■		
3月	■		
4月			■
5月			
6月			
7月	■	■	
8月	■	■	
9月	■	■	
10月			
11月			
12月	■		

### ③死亡年月齢

12例中9例が7ヶ月以下であり、とくに4～5ヶ月に5例見られる。1歳以上は2例である(表2)。

表2

年 齢	症例数	肺 組 織 型
1ヶ月	2例	(Ⅲ：Ⅲ)
2～3ヶ月	0	
4～5ヶ月	5例	(Ⅰ：Ⅰ：Ⅲ：Ⅲ：Ⅲ)
6～7ヶ月	2例	(Ⅲ：Ⅲ)
8～9ヶ月	0	
10～11ヶ月	1例	(Ⅱ)
12ヶ月以上	2例	(Ⅱ：Ⅰ)

### ④死亡時刻

12時から18時までの間に4例、0時から6時、6時から12時においてはそれぞれ3例、18時から24時までには2例発生している。

### ⑤死亡場所

自宅—11時、保育所—1例である。

### ⑥その他

- 死亡直前に感冒様症状の明らかなものは12例中2例である。
- うつ伏せにて死亡していたものは12例中7例である。
- 発見時嘔吐があったものは1例も無く、剖検時に胃内容を認めたものは9例であるが、内容物は年齢相当の離乳食を中心としていた。また、気管支に胃内容等の吸引所見のあるものは1例も無い。

## II. 肺の組織学的検討

肺の組織学的所見分類については57年度の報告書に記載したものをを用いた。Ⅰ型：うっ血またはうっ血性水腫がみられる肺(比較的広範囲)、Ⅱ型：気管支炎、同周囲炎または肺炎がみられる肺(一部または限局性)、Ⅲ型：胞隔に円形細胞浸潤がみられる肺(部分的または比較的び慢性)。以上の3型に分け、同一症例の中に overlapするものがあれば最も優意に病変としての拡がりをも認める型とした。結果はⅢ型が7例と優意に多かった(表3)。また、表2からわかる様に、Ⅲ型はすべて7ヶ月以下の好発年齢に見られる。

表3

肺組織型	症例数
Ⅰ 型	3 例
Ⅱ 型	2 例
Ⅲ 型	7 例

## まとめ

疫学的事項に関しては、死亡月以外はほぼ前回の全国統計（昭和58年3月）と同様の結果が得られた。

肺組織学的所見の型分類については、従来漠然と云われていた「肺炎」が如何なる程度、質であるかを具体的に把握することが出来、直接死因とは成り得ないとしても、その肺所見が死亡した児に与えた影響を推察することが可能であるという点からも必要であると思われる。

また、臓器全体として機能している肺に与える病変の影響というものを考え、その為に主気管支を含む肺の大切片をつくり、上記3型の病変の肺全体に対する拡がりについても検討する必要があると考える。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



過去3年間に「乳幼児突然死」と診断され解剖が行なわれた症例を収集し、疫学班(2)(渡辺富雄分担研究者と研究協力者)で検討し「SIDS」とされた12例について臨床病理学的に検討を行なったので報告する。

疫学的事項に関しては死体検案書を参考にしたためデータが不十分であるが分かる範囲で行ない、また病理組織学的には多くの臓器について検索したが、この度は肺の所見について述べる。なお、肺の病理組織学的所見は昭和57年度「乳幼児突然死(SIDS)」に関する研究、研究報告書(昭和58年3月)に発表(34頁)してある分類を用いた。